

所在地 宮城県仙台市宮城野区東仙台六丁目
立地環境 七北田川および広瀬川によって形成された標高 30 ～ 100 m の河岸段丘
発見遺構 瓦窯、整地面、焼土遺構、溝、区画溝 3 条、粘土採掘坑、土坑、石溜など
年代 8 世紀後半～9 世紀前半

遺跡の概要

安養寺下窯跡は、仙台市の北側に広がる七北田丘陵上にある。この丘陵は北側を七北田川、南側を広瀬川によって開析され、仙台平野に突出している。この丘陵南東端は「台原・小田原丘陵」と呼ばれる東西に細長い丘陵で、この丘陵の南側に多数の窯跡群が分布しており、これらの窯跡は「台原・小田原窯跡群」と総称される。安養寺下窯跡はこの群内の東部に位置している（第 1 図）。



第 1 図 安養寺下窯跡の位置

1972 年に古窯跡研究会・仙台育英学園高等学校考古学研究部が第 1 次調査を行い、1987 年から 1995 年まで継続的に第 2 ～ 10 次調査が行われた。調査を通して 18 基の瓦窯が確認されたほか、整地面 3 か所、焼土遺構 1 基、溝 4 条、区画溝 3 条、粘土採掘坑、土坑 1 基、石溜 1 か所などの遺構が確認されている（第 2 図）。確認された窯は、立地や配置関係、窯体構造、出土瓦から 3 群に区分され、北から南に向かって時期変遷をたどることが明らかとなった。

各窯群の概要

【第 I 窯群】（第 3 図）

15 ～ 18 号窯、焼土遺構 1 基、第 3 整地面、第 3 区画溝から成り、窯は 15 号と 18 号が精査されている。この窯群が位置する斜面は、東西 25 m、南北 25 m 程の方形に整地されており、計画的な窯の構築が行われたと推定されている。窯体構造は、床面が約 10° の傾斜を持つ半地下式有階無段窖窯であり、16・17 号窯も同構造であるとみられている。窯体の全長は 4.5 ～ 4.85 m、幅は 1.05 ～ 1.6 m であり、いずれも全長に対して幅広な長楕円形の窯体であることが特徴である。また、いずれも窯体の上部を囲み斜面下方に開口する U 字形の溝が付随する。

この窯群からは重弁蓮花文軒丸瓦（222）と偏行唐草文軒平瓦（620）が出土しており、軒瓦はこのセットが主として焼成されたと考えられている（瓦の分類・型番は『多賀城跡 政庁跡本文編』（多賀城研 1982）に依拠した。以下同じ）。また、15 号窯からは軒丸瓦 222 型式の中房が磨滅したタイプ（222x）が出土しており、第 I 窯群が長期間操業していたことが示唆されている。

【第 II 窯群】（第 4 図）

11 ～ 14 号窯、第 1 整地面、第 2 整地面、第 2 区画溝から成り、窯は 11 号と 14 号が精査されている。第 I 窯群よりも 1 m 程度高位置にある。窯体構造は半地下式有階無段窖窯で、12・13 号窯も同構造であると推定されている。窯体の全長は 5.2 ～ 5.65 m、幅は 1.0 ～ 1.14 m である。また、第 I 窯群

同様、いずれの窯でも窯体上部を囲むU字形の溝が確認されている。

基本的には第Ⅰ窯群と同構造であるが、燃焼部と焼成部の間の階は、窯構築時に造られたのちすぐに埋め込まれ、階としての機能を喪失する。また、窯体も第Ⅰ窯群に比して若干長くなる。

出土した軒瓦は第Ⅰ群と同様、重弁蓮華文軒丸瓦（222）と偏行唐草文軒平瓦（620）が主体であるが、重弁蓮華文軒丸瓦（320）や重弧文軒平瓦（610）など第Ⅰ窯群では見られなかった型式も出土している。

【第Ⅲ窯群】（第5・6図）

1～10号窯、粘土採掘坑、第1区画溝、その他溝4条、土坑1基、石溜から成る。窯は1～3・7・9・10号の6基が精査されている。この窯群は第2窯群よりも8～10m程度高位置にある。窯体構造は半地下式無階無段窖窯で、窯体の全長は6.2～9.0m、幅58cm～1.0mとややバラつきがある。第Ⅰ・Ⅱ窯群と窯体構造が異なるほか、比較的細長い窯体プランを持つことが特徴である。

出土した軒瓦は、重弁蓮花文軒丸瓦（222・320・431）、重弧文軒平瓦（610）、偏行唐草文軒平瓦（620）など第Ⅰ・Ⅱ窯群で出土した型式に加え、単弧文軒平瓦（640）や二重波文軒平瓦（650）がある。この窯群からは、重弁蓮華文軒丸瓦（320）と二重波文軒平瓦（650）の出土量が多く、このセットが主として焼成されたと考えられている。

窯群の変遷

確認された窯は、窯体構造の特徴、特に燃焼部と焼成部の間の「階」の有無によって大別されている（文献2）。

第Ⅰ・Ⅱ窯群は、半地下式有階無段窖窯という点で共通するが、第Ⅰ窯群は明瞭な階を有し、第Ⅱ窯群は階が不明瞭となり、次第にその機能が失われる。このことから、第Ⅰ窯群から第Ⅱ窯群への変遷が考えられている。また、階を持たない第Ⅲ窯群の中でも構造に若干の違いがみられる。特徴的なのは10号窯で、下層床面には階の痕跡があり、床面上層は無階となる。第Ⅲ窯群のその他の9基は当初から無階無段の窖窯として構築されたと考えられることから、第Ⅲ窯群の中でも10号窯から1～9号窯の時期変遷が推定されている。

また、出土した軒瓦もこの窯構造の差異にほぼ対応するように組み合わせが異なる。出土状況や数量から、重弁蓮華文軒丸瓦（222）と偏行唐草文軒平瓦（620）、軒丸瓦（222）と単弧文軒平瓦（640）、重弁蓮華文軒丸瓦（320）と二重波文軒平瓦（650）の3種のセット（順にa・b・c）が考えられている。aタイプは第Ⅰ・Ⅱ窯群及び第Ⅲ窯群10号窯下層、bタイプは10号窯下層、cタイプは10号窯上層と1～9号窯からそれぞれ出土している。

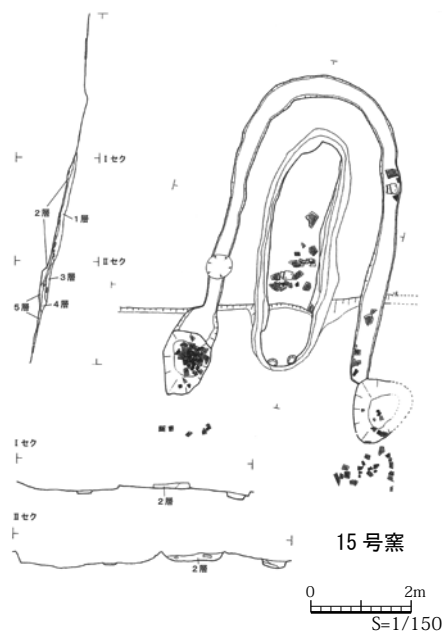
以上のことから、安養寺下窯跡では、第Ⅰ・Ⅱ窯群を第1段階、第Ⅲ窯群10号窯下層を第2段階、第Ⅲ窯群のその他を第3段階とし、第1から第2、第3の順で変遷をたどるとみられている。また、供給先での瓦の出土状況や軒瓦型式の共通関係から、第1段階は陸奥国分寺及び尼寺、第2及び第3段階は多賀城への供給が推定されている。

関連文献

- 1 古窯跡研究会 1973「安養寺下瓦窯跡発掘調査概報」『陸奥国官窯跡群―台の原古窯跡群調査研究報告―』古窯跡研究会研究報告第2冊
- 2 古窯跡研究会・仙台育英学園高等学校考古学研究部 2009「安養寺下瓦窯跡調査報告書」『秀光中等教育学校・仙台育英学園高等学校研究紀要』第24号
- 3 結城慎一 1981「安養寺下窯跡の検討」『陸奥国官窯跡群 10周年記念号』古窯跡研究会研究報告第6冊



第2図 安養寺下窯跡全体図（文献2）



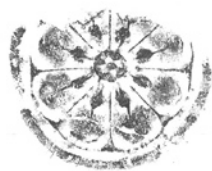
【第I窯群】（15～18号窯）

構造：半地下式有階無段窖窯

特徴：明瞭な階を有する

出土瓦：aタイプ

（重弁蓮華文軒丸瓦（222）+偏行唐草文軒平瓦（620））



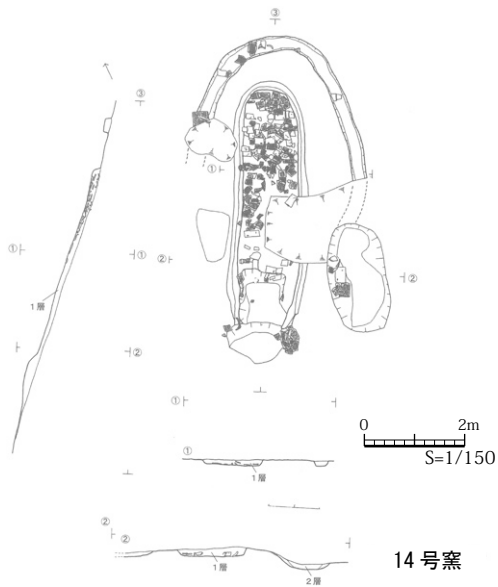
222



620



第3図 第I窯群の特徴（文献2から作成）



14号窯

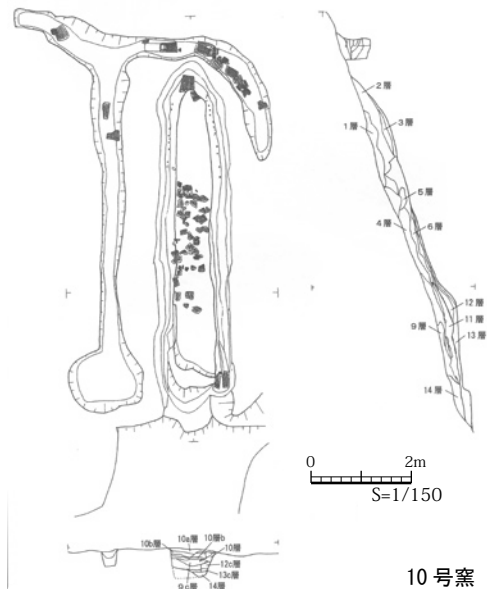
第4図 第Ⅱ窯群の特徴 (文献2)

【第Ⅱ窯群】(11～14号窯)

構造：半地下式有階無段窖窯

特徴：階が不明瞭となり、次第にその機能が失われる

出土瓦：aタイプ



10号窯

第5図 第Ⅲ窯群の特徴 (10号窯) (文献2から作成)

【第Ⅲ窯群】(10号窯)

構造：半地下式有階無段窖窯 → 半地下式無階無段窖窯

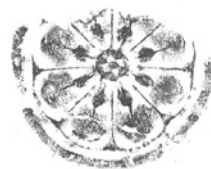
特徴：下層床面には階の痕跡があり、床面上層は無階となる

出土瓦：下層 aタイプおよびbタイプ

(軒丸瓦 (222) と単弧文軒平瓦 (640))

上層 cタイプ

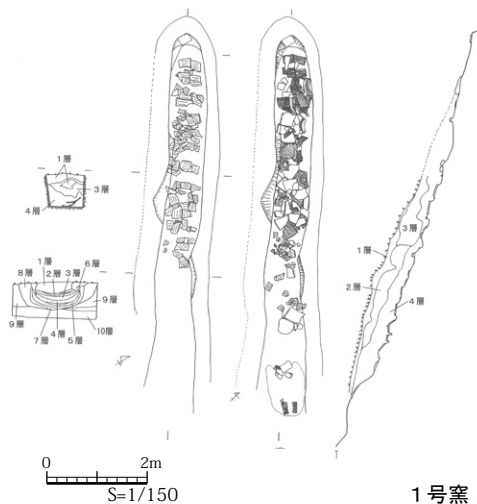
(重弁蓮華文軒丸瓦 (320) と二重波文軒平瓦 (650))



222



640



1号窯

第6図 第Ⅲ窯群の特徴 (1～9号窯) (文献2から作成)

【第Ⅲ窯群】(1～9号窯)

構造：半地下式無階無段窖窯

出土瓦：cタイプ

(重弁蓮華文軒丸瓦 (320) と二重波文軒平瓦 (650))



320



650

